

三蔵弁解 下焦精蔵 附 方意

腎は北方 坎水中に一つの陽気がある



真ん中の陽爻が命門の火

真陰が盛んなときは、火は盛んにならない

1、滋陰降火湯

滋陰降火湯で陰火を消す

慈溪 王節齋 (オウサツサイ) (1332~1391)	《明医雑著》	処方構成のみで方名なし
箕城 趙晟 (チョウセイ)	《復明医雑著》	補陰瀉火湯と名づく
雲林 龔廷賢 (キョウテイケン) (16世紀)	《万病回春》	補陰瀉火湯の川芎を麦門冬に変更し滋陰降湯と名づける

滋陰降火湯

構成	分量	修治	味	性質		作用
当帰	1 銭 2 分	酒洗 ^{※1}	甘辛	微温 ^{※2}	重潤	陰中の微陽・心脾の血を生じる 心脾の血はともに陽中の陰血
白芍薬	1 銭 3 分	酒炒 ^{※3}	酸	寒		当帰・地黄で生じる潤いを収斂し泄れない様にする事で陰を集め精血を補充する 血熱を冷ます
生地黄 ^{※4}	8 分	姜炒	甘	寒	甚重・潤湿黒色 ・極陰	腎に入り真水を潤す,陰分の熱を冷ます ^{※5}
熟地黄 ^{※4}	1 銭		(甘)	(微温)		真陰(精血)を潤補する(生地黄より強力) ^{※5}
天門冬	1 銭		甘	寒		肺熱を冷まし肺を潤す ^{※6}
麦門冬	1 銭		甘	寒		肺心にめぐり燥を潤し熱を冷ます
白朮	1 銭		(甘)	(温)		中焦の脾気、胃氣を養う爲に ①当帰,地黄などの潤剤の湿を防ぐ ②知母,黄柏の苦寒を防ぐ
陳皮	7 分 ^{※6}		辛苦	微温		①氣をめぐらし中焦を化す ②当帰,地黄,芍薬の陰薬の渋滞を防ぐ ③白朮,甘草の補中機能を強化する
黄柏	5 分	蜜水炒	苦	寒	軽 ^{※7}	下焦の熱を冷ます。知母の重沈にひかれ下焦水間に達し、知母とともに相火の上炎を取る
知母	5 分		苦	寒	重 ^{※8}	下焦の熱を冷ます。相火が上炎して心肺に乗ずるのを肺から迫り下焦に降りる
甘草	5 分		(甘)	(平)		脾が燥き過ぎないように中焦に潤液を集める保つ

当帰

人物	時代		味	性	
神農本草経	後漢	中品 ^{※9}	甘		
雷公	五世紀		辛	微寒	雷公炮炙(ホウシヤク) 論
李東垣	1180～1251		甘辛	微温	
陶隱居(陶弘景)	456～536			甚温	神農本草経の増補改訂

味・性の違いは方剤における佐使の薬^{※10}に引かれることより微温にも微寒にもなる

※1 紹興酒 50ml を霧吹きにて、当帰500g にムラ無く噴霧する。これをラップで密封し、1時間ほど放置して十分しみ込ませた後、日陰干しし、乾燥したら完成。酒製にする事で、薬中の陰が開いて補血の効能が強くなる。

※2 気味の辛甘微温は2月末～3月始めの季節に似ている。この時期は微温だが薄着では寒く、厚着では暖かい。当帰の本性は微温だが、寒薬と合わせれば微寒になり、熱剤とあわせれば全くの温薬に見える。

※3 芍薬の寒性収斂の力が強すぎ、かえって滞渋させてしまうので、酒炒に製して酸収渋滞の性をゆるめている
酒炙芍薬…紹興酒 50ml を霧吹きにて、当帰500g にムラ無く噴霧する。これをラップで密封し、1時間ほど放置して十分しみ込ませた後、鉄鍋に取り、弱火にて乾煎りする。表面が微褐色になったら完成。

※4

生地黄	地面から掘り出し何も加工しない。液汁が非常に豊富（鮮地黄）	寒
乾地黄	生地黄を天日乾燥させる。書物によっては生地黄とも	微寒
熟地黄	乾地黄に酒をしみ込ませた後蒸したもの	微温

※5 生地黄を氷に例えると、熟地黄は冷水に例えられる。氷である生地黄は清熱に優れ、冷水である熟地黄は補陰、潤陰に優れる

※6 火の性は上に上がるので、陰が虚して相火が盛んになると心肺に向かって上がる。肺は金、心は火で火は金を剋すので、陰虚の相火は肺金を剋し、同類を求め心火に合す

※6 陳皮の辛苦が多すぎると、気道が散通されすぎ、陰薬の収補する機能が低下するので7分にしてある。

※7 沸騰した湯気を扇いで冷ますように、相火の炎気を去り浮熱を除く

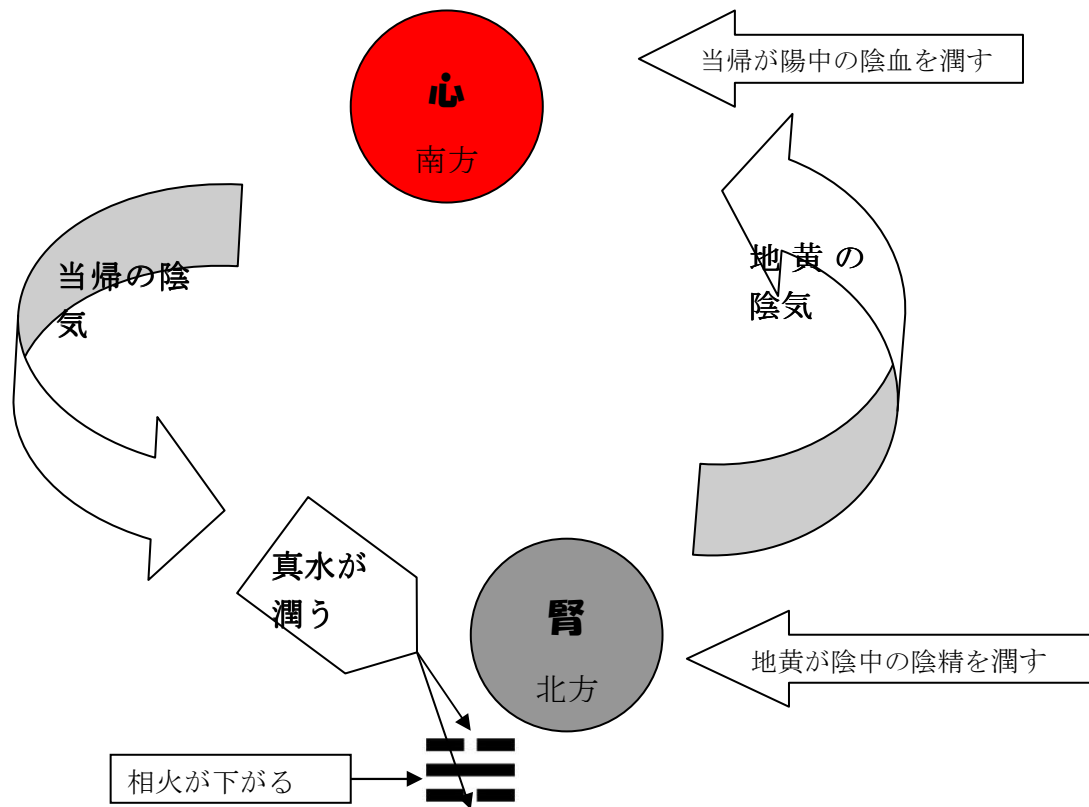
※8 湯に直接氷を入れて冷ますように、直接水中の相火を取り除いて下焦を冷ます。

※9

上品	120種	君薬と言ひ、生命を養うことを司る。毒性が無く、多く服用しても、長く服用しても人を傷つけることが無い。不老延命の薬と言われる。予防薬。
中品	120種	臣薬と言ひ、精を養うことを司る。有毒と無毒とがあるので、毒の有無を知って、適宜に配合して用いるべきである。病を防ぎ、体力を補う力がある。治療薬。
下品	125種	佐薬、使薬。主として病を治すことを司る。毒性が多いので、長期間の服用を慎むこと。

※10

君薬	中心となる重要生薬
臣薬	君薬について処方の中で重要な働きをするもの
佐薬	君薬の働きを助ける
使薬	君臣佐薬の補助



陰虛火動の火は水の外にあるのではなく、陰が虚すれば水が消え、水が虚すれば水はすべて火になる

白朮・陳皮・甘草

陳皮・白朮・甘草の三味で脾胃を補養して、後天の精血の源を助ける

2、四物湯 補血の主方

四物湯

構成	分量	味	性		作用
当帰	(4.0g)	甘	微温	厚	上中焦の陰を補い血を生ず
熟地黄	(4.0g)	甘	微寒	厚・潤重・	下焦の陰を補い精を生ず
白芍薬	(4.0g)	酸	寒		当帰,地黄が生じた陰液を収斂させる
川芎	(4.0g)	辛	温		当帰・地黄の陰を上中焦の間に引き上げる 血中の気をめぐらし、血を流行させる

3、八物湯 八珍湯

四物湯と四君子湯の両湯を合わせ

八物湯	四物湯	当帰・熟地黄・白芍薬・川芎	補血
	四君子湯	人參・白朮・茯苓・甘草	補気

4、十全大補湯

気血両虚の甚だしい者

八物湯に黄耆と肉桂を加える

構成	色	味	性		作用
黄耆					毛穴を閉じ脾肺の元気を囲って泄れない様にする※11
肉桂	赤黒	甘辛	大温	軽浮	下焦の水中の陽火を助ける (まず中焦を温め徐々に降りて命門を温養する)

※11 十全大補湯の証は脾肺の元気が非常に虚している。黄耆で脾肺の気を保つと四君の人参・白朮の益す所の元気がよく満ちてくる。四物湯に芍薬をいれ当帰・地黄の生血を泄らさない様に、四君に黄耆を入れて人参・白朮の補気が泄れないようにする。気が満ちれば血がよく生じる。血が満ちれば気がよく生じる。

肉桂 中焦が肉桂の温を得ると、穀氣がよく化されて營衛が発生する。そして命門の陽火が肉桂の温を得て、ますます營衛の精気を温蒸し血がよく潤い気がよく発生する

